論文内容の要旨

論文題目

王安憶論 ――「新時期」を生きた「小説家」の精神史として

氏名　　松村　志乃

本論文は、現代中国の作家・王安憶（1954-）の 1980、90 年代の文学テクストを、そのアイデンティティをめぐる問題意識に焦点を当てて論じたものである。

文化大革命（1966-76）後政治的プロパガンダから脱却して花開いた文学は、「新時期文学」と呼ばれている。「新時期」とは明確な時期区分を表したことばではなく、新しい時代の新しい文学への期待という価値評価が込められたことばだ。文革期に農村に下放した体験を持つ「知識青年」世代の作家として「新時期」に登場した王安憶は、1989 年の第二次天安門事件に衝撃を受けるも、今日に至るまで旺盛な創作意欲をもって作家活動を続けてきた。

第一章は、80 年代の「新時期文学」の思想的特徴が象徴的にあらわれた文芸思潮「尋根文学（ルーツ探し文学）」を、王安憶の視角から論じている。「知識青年」世代の作家が主導した「尋根」議論は、当時の文学に対する期待感と、中国社会の多様性・可能性とが見て取れたが、一方で、中国の後れた農村の「民族文化」を描き、「世界」に欲望される「中国」を提示することで、近代化に邁進する中国の底力を表現しようとする側面をもっていた。

当時、王安憶は「小鮑荘」（1985）が「尋根文学」として高く評価され、意欲的にその手法を取り入れたが、議論のこのような戦略的側面が理解できなかった。そこで彼女は、訪米が契機となった自身のアイデンティティに関する問題意識と議論とを結び付け、「尋根」とは自分の命のルーツとアイデンティティを探求することだと考えた。その意味では、王安憶にとってのルーツ（アイデンティティ）探索は、他者でしかありえない農村を書いた「小鮑荘」ではなく、後の「私

の来歴」（1985）や「海上繁華夢」（1996）といったテクストに見ることができるのだ。

第二章では、王安憶が1989年の第二次天安門事件をどのように考えたかについて論じている。事件に世界観が打ち崩されるような衝撃を受けた王安憶は、一時期休筆した後、「おじさんの物語」（1990）を発表した。そこには、社会主義の理想と共に歩んできた上の世代の知識人「おじさん」、ひいては「新中国」への失望が表現されたと同時に、知識人としての理想像の喪失が、80 年代に活躍した若手作家「私」の「書く」ことに対する自信を失わせていることが表現されていた。この時期の王安憶は、精神的支柱「おじさん」を失い、文学者としてのアイデンティティを見失いかけていたのである。

90 年代初期、「人文精神」論争にも見られるように、アイデンティティの危機は中国の知識人に共通した思いであった。当時の王安憶は文学創作の立場から、その同時代的課題に取り組もうとしていたのである。

そこで、第三章は、1993 年復旦大学で行われた王安憶の小説学講義を読み解くことで、90 年代初期の王安憶の問題意識を明らかにしている。講義で王安憶は、従来的意味における知識人、なかでも社会変革を目指して共産主義の理想に邁進してきた上の世代の知識人を対象化するために、自分は「仕事」として小説創作の専門的技術を身につけた「小説家（小説製作者）」になったのだと宣言し、「小説家」の構築する理想的小説世界を「心霊世界」という概念で説明した。だが議論は多くの問題と矛盾をはらんでいた。そこには、かつての文学者アイデンティティと、新たな自己認識「小説家」との間で揺らぐ王安憶の姿が見て取れた。

第四章は、王安憶の「心霊世界」構想が、90 年代前半の実作の中でいかに表現されたかを、『紀実と虚構』（1993）によって考察している。『紀実と虚構』において王安憶は、80 年代のモチーフを再度用いた物語を展開させながら、「書き手」「私」の存在を過度に強調することで、中国の現代文学以来主流であったリアリズム的手法に疑問を投げかけた。それは「心霊世界」という神話的世界を実作において表現したといえるものではなかった。実験的にすぎる『紀実と虚構』は、「小説家」という新たな自己認識を掲げながらも、なお足場を探しあぐねていた、王安憶の文学に対する不安や懐疑が表れた小説だった。

文学者としての立ち位置を探しあぐね、冗長で観念的な小説を書いていた王安憶を結果的に救い、その文学のアイデンティティの拠り所となったのが、90 年代半ば以降書かれた原風景としての「上海」だった。第五章で解読した『長恨歌』（1995）は、高度経済成長を遂げる中国で、建国後初めて書かれた本格的都市小説である。

『長恨歌』には、1940 年代から 80 年代までの上海を生きた女性の一生が書かれている。なかでも重要なのは、王安憶が幼少期から青年期までを過ごした原風景「上海」が表現された、50 年から 70 年代にかけての上海弄堂の生活風景の描写である。テクストは、上海の弄堂に暮らす女性の「生計」に支えられた生活の中にある「生活の美学」を描き出し、その喪失から主人公の悲惨な末期を導き出すことで、「老上海」ブームに警鐘を鳴らそうとする。こうして王安憶は、原風景としての「上海」を抒情的に書くことで、「小説家」として豊かな文学世界を創造すると同時に、上海の今日的問題に批判意識を向けることで、社会に対し批判精神と責任意識をもつ知識人の精神態度を保持することに成功する。王安憶は自己の生活の場である原風景「上海」を書

くことで初めて、文学者アイデンティティの拠り所を得たのである。

その問題意識は、やがて「現代化」に伴いグローバル化する中国・上海に生きる者が、いかに自己アイデンティティを保つか、という問題に向けられるようになる。第六章で読み解いた「ビルを愛して」（1996）には、「西洋（世界）」を追求することの歪みと悲哀、および進歩的イメージとしての「西洋」を自己のアイデンティティの拠り所にすることの問題が書かれていた。「西洋（世界）」を追求する精神態度を相対化できない上海の女性芸術家・阿三を「罪」に陥れることで、王安憶は「進歩」を望む阿三に共感と同情を寄せつつも、厳しく突き放すのである。

では、現代の中国に生きる者は「進歩」を求める気持ちをどのような方向に持って行けばよいのか。第 7 章で論じた『富萍』は、幼少期・青年期（1960 年代）の王安憶の原風景「上海」を内包したユートピア的世界を構築することで、その問いに答えようとする。

『富萍』には、従来の王安憶テクストにおいて不安要素を表す記号でしかなかった上海郊外の風景が、豊かな実りを生み出す地として書かれた。そのことが、王安憶の「上海」テクストを閉鎖性から解放し、地方から来る者、地方へ戻ろうとする者を柔軟に受け入れ、緩やかに流動する都市に変えた。主人公・富萍は、自力で働き食べてゆく清貧の生活に、彼女自身の価値観の充足を見出す。その富萍の生き方に、王安憶は上海のユートピアを描き出すのだ。

王暁明によると、90 年代は「新たなイデオロギー」が生まれた時代であり、王安憶の小説はそうした中国社会への対抗言説である。王安憶の「妙妙」（1991）や「ビルを愛して」には、ある一定の基準を定めそこに「進歩」しなければならないとする、モダニティのもたらした価値観に翻弄される女性の悲劇が書かれたが、富萍はその生き方をもって、そうしたモダンの価値観を鮮やかに解体してみせる。

90 年代初期の王安憶は、80 年代までの理想主義的知識人のあり方への「懐念」を、当時出会った台湾知識人の陳映真への「懐念」に託して、「ユートピア詩篇」（1991）を書き上げた。その意味で、王安憶が 90 年代末に「ユートピア」を書くことは、一度は相対化した理想主義の価値が、再度意味を持ったことを意味している。確かに『富萍』のユートピアの精神性の高さは、革命中国のイデオロギーとの親和性を断ち切れてはいないが、「小説家」としての立ち位置のなかで、中国のいまを思考する、そうすることで初めて王安憶のユートピアは意味を持つだろう。

王安憶の 80、90 年代のテクストには、社会主義を究極的に実現しようとした文化大革命に多感な青春期を過ごし、ようやく本格的に作家として歩もうというときに、自己に潜在していた社会主義の理想への相対化を迫られた、ひとりの現代中国知識人の歩みを見ることができる。中国社会と共にありながら、苦悩と葛藤の中、抒情的な小説世界を構築してきた王安憶は、まさに「新時期」を生きた「小説家」だといえるのである。